



MORIOKA
ROTARY CLUB WEEKLY

第6回例会(8月9日)
平成25年8月23日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10
川徳デパート内
例会場 同上 TEL(651)1111(代)
FAX(653)5622
例会日 毎週金曜日12時30分～

会長 平井 滋
幹事 平野 佳則
会報 金子 真也
クラブ直通電話 TEL(653)5682

Engage Rotary. Change Lives. "ロータリーを実践し みんなに豊かな人生を"…… Ron D. Burton



ゲスト卓話

「りんご畑の物語」

松本りんご園・mi café 代表
松本 直子 様

スピーカー紹介

旧山形村生まれ。岩手大学人文社会科学部卒業。大学時代は演劇活動に打ち込み、演劇が縁でご主人と知り合った。卒業後はコンピュータの営業職に従事した後、結婚。農家の長男の嫁となる。平成11年から「りんご畑deコンサート」を企画・運営。毎回多数の来場者があり、関東方面から駆けつけるファンもいる。平成19年にカフェ「mi café (ミカフェ)」をオープン。ブルーベリー栽培の女性グループ「藍の会」代表など。一男三女の母。
(阿部広会員)

盛岡市の黒川から来ました。黒川は昔から果樹栽培が行われており、今はブルーベリーの栽培がさかんです。

私は山形村の産で、縁があって盛岡に嫁いで27年、一男三女がおります。山形村は純農村地帯ですが、私の両親はともに公務員で、農業は一切関わることなく育ちました。高校・大学と盛岡で過ごしましたが、嫁いでビックリしたのは、農家は1年の収入で大家族が暮らさなければならぬこと。それにどうも馴染めず、収入を増やすため、「何とか方法はないか」と思い、辿り着いたのがりんご畑にカフェを開く構想でした。

最初は、採れた農作物を使う加工場を考えたのですが、ジュースもジャムもお菓子も、それぞれの加工場が必要になるので、借金してもし切れないほどの資金が必要になる。これではとても無理と、次に考えたのは、厨房としての許可をいただいて「お出しするものは何でも良い」というお墨付きをいただくこと。小規模で、自前の農産物を無駄なく使うには充分だろうということで「mi café (ミ・カフェ)」を開きました。リンゴもブルーベリーも「実」になるものを作っているの、ミ・カフェと名付けました。景色がとても良くて、秋田駒ヶ岳や奥羽山系を180度見渡すことができる高台にあります。景色を見ることができ「見」カフェ、それから未完成の「未」カフェ、魅力の「魅」など、いろいろな「み」という意味を込めた名前です。2007年にオープンしました。年々物価が上がって当たり前ですが、りんごやブルーベリーの値段が上がることはありません。それで「裾物まで、最後まで残らず使うことができれば、お金に換えることができれば、暮らしが変わるのではないか」という工夫のひとつが、カフェをオープ

ンすることでした。

専業で農業をすることが私たち夫婦にとってはプライドでしたので、専業で農業を続けるには、この方法がベストだろうと思いました。規模拡大と、農業改良センターからお墨付きをいただいたことでもあります。規模拡大すると農産物ですから、同じ味が他の農地から採れるとは限らない。私たちの腕では手に負えないと思いましたので、手元に今ある畑から生まれるものを無駄なく使うことが、私たちにできることだと考えて mi café をオープンしました。

ただ、農地のままでカフェを開きたかったので、お役所とのケンケンガクガクが長くありました。「構想10年、実行4年」と、私はよく言いますが、許可をいただくまでに4年かかりました。私のところは上級農地と呼ばれるところで「農業をするための土地なので、商売をすることは想定されていません」と言われました。私たちは「これができなければ、専業で農業を続けていけません」と訴えて4年かかりました。「前例がない」「岩手でやるには10年早い」と言われたり、金曜日にオーケーが出たのに月曜日にはひっくり返っていたり、年度が替わると担当者が代わり、引き継ぎがされていなくて話が進まなかったりということがずっと続きました。粘り強く交渉していく中で、役所でも協力してくれる人が出てきました。法律にふれず、正攻法にこだわって、いっしょに歩んでくれる人が出て来たお蔭で、縦社会であるお役所が横の連携を取ってくれる場面も出てきました。そこからボンと前に進むことができたと思っています。

当時、規制の数々はとても邪魔だと思っていました。「お役所というのは、面倒なところだ」と思っていたのですが、実際に動き始めると、「規

制の在り方も良いものだな」と思うこともあり
ました。それというの、農地だから住宅地に
しにくい仕組みになっているのは、私たち
のように農業を続けていきたい者にはありが
たい規制です。それから、自分の農業生産を
続けていくうちに、地産地消の推進のため、
「カフェで出すメニューの5割は自分の畑か
ら生まれた農産物を使うように」という規
制もかけられました。覚悟のほどを確かめ
るためのお役所の提示だったと思います。
それから「コンクリートを打ってはいけな
い」という規制もありました。なぜなら「
農地だから」。そういう規制のお蔭で、農
地は農地らしく、カフェらしくあると思
います。知恵を絞っているうちに、「自分の
農作物を50%以上使わなくてはいいけ
ない」という規制のお蔭で、そこでしか
お出しできないメニューが生まれました。
たとえば、大抵のりんごジュースは生産
量の多いフジで作ったり、残ったりりん
ごをかき集めてミックスで作ってしま
ったりが通常でしょうけれども、当園は
17品種を生産している中、10品種で
続きます。カフェに来てもらえば、利き
りんごジュースができます。うちのりん
ごは無添加なので、色も味もそれぞれ
の品種で違うことがわかります。お客
様が小さなグラスで飲み比べて、帰
りに好みのりんごジュースを買って
帰っていただけます。それから、りん
ごの甘煮（コンポート）を作るときは、
砂糖ではなく、りんごのシロップを
使います。これも組み合わせの妙で、
りんごジュースでりんごを煮るとい
う親子煮というメニューも、りんご
農家ならではのものです。それから、
ランチは普通のお店であれば、冬
でも緑のサラダ、赤であればトマ
トを添えるのが普通だと思います
が、農家の畑には冬だと、緑も
トマトがありません。うちでは冬、
サラダの彩りはトマトの代わりに
赤かぶの甘酢漬を入れます。「工
夫すればできるものだなあ」とい
うことで、これも規制のため、ない
知恵を絞って生まれた発想でした。
それから、山の上の不便なところ
にあるカフェですが、お蔭さまで
リピート客が増えています。大きく
儲かるものではありませんが、確
実にやっつけられるという実感
を持つことができました。松本
りんご園の経営の大きな柱にな
っていると思います。山の上にあ
るカフェまで、細い道を通って
わざわざお出でになるお客様
には、そこでしか味わえない
ものならではのメニューでおも
てなしいたいと思っています。
町場のお店と同じ物をお出し
したのでは意味がないと思
いますので、お客様にメ
ニューをお出ししながら、「こ
れは、こういうメニューです」
「こういうりんごです」とい
う話をお伝えできる物語があ
るメニューを、これからも作
っていきたく思います。

カフェの魅力は、ここならではのメニューと
景観です。農産物と景観は、自分たちにと
っては強力な武器に違いないと思ってい
ます。それを活かしながら、カフェを運
営していきたいと思っています。黒川
には、20代・30代の後継者が
ゴロゴロしています。彼らが「農業
って、面白いなあ」「この土地で
やっていける」と思ってくれるよ
うに、何かのかたちでmi caféを
活用してもらえるように発信して
いきたいと思っています。大きな
かたちでの発信はできませんが、
その代わりに地道で丁寧な発信
ができると思っています。岩手
県で初めて、農地の中にある
カフェとして許可をいただいた
感謝を噛みしめつつ、「少しでも
地域に恩返しができるように
努めることが役割かな」と思
っています。開店から6年目
になりますが、最近はその
ことをとみに感じるようにな
りました。

自慢したいことで「りんご畑で
コンサート」というチャリ
ティコンサートを開いていま
す。1999年が第1回目
でした。皆さんがロータリー
クラブで活動していらっし
やるように、女性の奉仕
団体である国際ソロブチ
ミストの25周年の創立
記念事業のひとつに、40
歳までの働く女性を集
めた社会奉仕団体・ベン
チャークラブを設立しよ
うという記念事業がござ
いました。当時、国際
ソロブチミスト盛岡の
皆さんにお声がけいた
だいて、私もベンチャー
クラブの末席に加えて
いただきました。それが
98年。そのとき、若い
女性が30人近くいた
中、私は初代会長を務
めさせていただきました。
その理由が振っています。
クラブの担当者がおっ
しゃった言葉が今も忘
れられません。いちばん
末の娘が乳飲み子で、
おっばいをやりながら
設立総会に参加して
いたのですが、「会長
をやりなさい」と言
われて、「なぜ私でしょ
うか?」と聞いたと
ころ、「あなたは子
どもの数がいちばん
多いからよ」とおっ
しゃいました。たしか
に、独身の方も多
くいました。また、
その担当者は「あ
なたが第一次産業
の従事者だから」と
もおっしゃいました。
「ここに集まった
中で、第一次産業
の従事者は、あ
なただけだから、
あなたが会長を
やりなさい」と、
おっしゃったの
です。わかったよ
うな、わからない
ような理由だ
ったのですが、
私はなぜか、
そのときはと
っても嬉しく
て、光栄なこと
だと思いました
ので、単純に
喜んで初代会
長をお引き受
けしました。

社会奉仕団体ですから、まず
最初にひらめいたのはチャリ
ティコンサートを開くこと
でした。そのためにホール
を借りると、それだけで
何十万円という経費が
飛んでしまいます。若い
人の会ですから、そんな
ことができる訳がなく、
そんなお金があったら、
寄付に回したほう
がよいと思いました。「
りんご畑を会場に、お

花見を兼ねてやってみようか」と私が提案して、りんごの花は5月の母の日が満開なので、「その頃にりんご畑を開放するから、弦楽四重奏の方々にお出でいただいて、そこでチャリティ募金を呼び掛けるチャリティコンサートをしましょうか?」と言ったところ、1999年5月にコンサートを開くことになりました。準備期間も短かったのですが、500名の皆さんが訪れました。花はちょうど満開で、お天気も大変良く、想像以上に素敵なコンサートになりました。それに味を占めて、1年置いて2回目を計画しました。近隣農家を核にして、農家主催のコンサートを行いました。春の農繁期で、田んぼがある家は田植えもありますから、「この忙しいときにコンサートだなんて、なぜ浮かれたことを言っているんだ」という声もありました。紆余曲折あって、今では地域に関わる人のお仕事やお住まい、地域の外で関わる人でも、このコンサートに賛同して下さる方や黒川が好きだと言ってく下さる方など、いろいろな年齢のさまざまな方が関わる実行委員会ができました。今では、その委員会を核に、みんなが素人ですが、手弁当でコンサートを開いています。13年間の間に6回、昨年5月に第6回目を開きました。昨年は、弦楽合奏に加えて、不來方高校の合唱部にも来ていただいて、感動的なコンサートになりました。関わって下さる方々がいろいろなかたちで関わって下さる、良いコンサートだと思っています。協賛金を出して下さる方もいらっしゃいます。駐車場として敷地を貸してくれる方もいらっしゃいます。それから、工務店さんが仮設トイレをプレゼントして下さることもあります。大工さんが一夜にして仮説ステージを組み立ててくれることもあります。バス会社の方が、不來方高校の生徒さん40人近くをバスで送迎ボランティアをして下さることもあります。地元の小中学生は、募金係として会場で呼び掛けをします。いただいた募金は、ほとんど寝たきりで生涯を終えるのではないかという重度の障害を抱えた子どもさんの施設に寄付しています。震災後は、寄付金の半分を岩手の学び希望基金にも送らせていただいています。いろいろなかたちで、それぞれの人が自分にできる範囲で関わってもらうことで、このりんご畑のコンサートを続けることができました。自分の利益にもならないコンサートですが、なかには「松本りんご園の宣伝のために、自分たちを利用するのか」と言って離れた人もいます。今、残っている人は、そんなケチ臭いことを言うよりも、人が喜ぶことを自分の楽しみに替えることができる人が集っています。とても雰囲気がいい。小中学生のボランティアは当日のスタッフですが、実行委員

として関わってくれる26人の最年少は22歳で、最年長は60歳です。予定通りであれば、来年の春にコンサートを開きたいと思っています。

震災以降、特に感じるのですが、りんご畑に集ってコンサートを楽しんでいただくということは、「いただいた募金を震災で親を亡くされたお子さんのためにお役立てください」とプレゼントするだけでなく、震災で心に傷を負った方、盛岡に移り住んでいる方、震災の被害を受けていない在住の方など、いろいろな方々にとって、心待ちに「来年は、あのコンサートがある」というふうに、何かを励みに日々を暮らすことがとても大事だと思うようになりました。また、そこで懐かしい顔ぶれと手を取り合って「元気だったかい」と確認を取り合ったのち、三々五々ご自宅に戻られる。そういう場を創りたい。それによって自分も癒されるように感じます。「若い世代にも、このコンサートを継続してもらえるといいなあ」と思っています。うちの子どもたちはなかなか大変そうだと思うのか、先頭を切って関わることには腰が引けている印象があります。うちの子どもでなくても、周りの若い人の中から、自分たちで実行委員会に加わりたいという声が上がったり、この地域の人でなくても若い世代に繋がっていけばいいだろうと思います。「何らかのかたちで、りんご畑という場を使ってもらえればいいなあ」と思っています。

最後に近くなりましたが、皆様をお願いをしたいと思いました。ロータリークラブの歴々の皆様は、盛岡のみならず、岩手県の経済界を牽引なさっているリーダーでいらっしゃると認識しております。私たちのような第一次産業の従事者とぜひ繋がってください。皆様には、いろいろな人脈がおありでしょうから、中には林業や漁業の人たちもいるでしょう。ぜひビジネスの面だけでなく、友人知人として第一次産業に従事している者を意識して欲しいと思います。農家は農家で固まってしまいがちなので、他の業界の方とお話する機会もないものですから、いつも「このままでは農業の分野はいかんなあ」と思っています。そういうときに、経済界のリーダーたる皆さんのような方と結びつくことができれば、大変良い刺激になると思います。もちろん、私たちのほうが前面に出て来て、コンタクトが取れるような状況を創らなければならぬと思っています。皆さんに第一次産業従事者との接点が生まれると、自然や気候の面で、岩手の今の状況がもっと肌身に染みて、感じることができるのではないかと思います。

カフェでは、作り立てのまめぶを1月から3月まで、お出ししています。ランチメニューとして冬の期間しかお出しできません。毎朝、コ

ロコ丸めてお出ししています。出汁は三陸産昆布。凍み豆腐も山形村の農家に嫁いだ友人から毎週、取り寄せています。できるだけ山形村本来のまめぶに近いものを、盛岡でもお出ししたいと思って、5年前からこさえています。このブームでお問い合わせをずいぶんもらいますが、まめぶの大量生産はとても難しい。昔は、

美味しい米や肉がある地域という訳でもなかったの、手間暇をかけることがおもてなしだったのだらうと思います。冠婚葬祭には、まめぶを振る舞う習慣があり、今もそれが伝わっています。機会がありましたら、皆さんもりんご畑のカフェに足を運んでもらえればと思います。今日は、ありがとうございました。

皆出席バッヂ 42年達成 川村 登会員

皆出席 57年を達成し、名誉会員となられた鈴木貞雄氏のあとを引き継ぎ、現在トップとなった川村登会員。実は鈴木貞雄会長年度（1975-76年度）の幹事役でありました。

また川村登会長年度（1996-97年度）の幹事役は、副会長席で微笑む福田荘介会員（現在皆出席 28年に向けて更新中）、そして副幹事役は 42年バッヂをお渡しした平井滋現会長（現在皆出席 19年に向けて更新中）だったのであります。こうした絆で、盛岡ロータリークラブは伝統とともに脈々と引き継がれていくのでありましょう。

皆出席 50年に向けて応援致します。



例 会 報 告

第 6 回例会
平成 25 年 8 月 9 日(金)

於 川徳 12時30分 開会点鐘

- ・司 会 平井 滋会長
- ・ソング 我らの生業
- ・会長報告 平井 滋会長
- ・ゲスト 松本直子様（松本リンゴ園 mi café 代表）

- ・ビジター 高橋 理さん（盛岡北 R.C.）
- ・皆出席バッヂ 川村 登君（42年）。
- ・入会祝 川村 登君。

【他クラブ例会変更のお知らせ】

- 盛岡西 R.C.= 8月29日(木)は、ガバナー公式訪問例会のため18:30~。
- 盛岡滝ノ沢 R.C.= 8月29日(木)

は、盛岡西北 R.C.とのガバナー公式訪問合同例会のため30日(金) 18:30~。

●メークアップ

盛岡西 R.C.=吉田(幸)君。盛岡南 R.C.=福田・熊谷(祐)・高柳・若松君。盛岡東 R.C.=坂本君。盛岡西北 R.C.=長澤君。盛岡滝ノ沢 R.C.=勝部・佐藤(義)君。クラブ委員会=阿部(勇)・吉田(育)君。

出席報告

会員数 / 68 名

出席数 / 44 名

出席率 / 69.84%

前々回修正出席率 / 86.15%

プログラムの
お知らせ

8月23日(金) ゲスト卓話 松岡 博様

「希望郷いわて国体・希望郷いわて大会の成功に向けて」

30日(金) 会員卓話 千葉隆史 会員

「睡眠の基礎知識 一より良い眠りのために」

●本号編集担当 / 金子 真也

●次号編集担当 / 桑田 周一